

## 島嶼学概論 I 硫黄島実習レポート

農学研究科生物生産学専攻農業経済学コース 大学院1年 宮園 颯人

本レポートでは、

- (1) 硫黄島実習の感想
- (2) 自己観点から見た硫黄島のまとめ
- (3) 硫黄島の地域活性化について考えたこと

これら3つを主題にし、今回の実習で学び、考えたことを述べていく。

### (1) 硫黄島実習の感想

島嶼学概論 I の講義での、硫黄島での1泊2日の実習はとても有意義なものであった。

硫黄島での実習が行われるにあたり、その事前学習の講義では、「島嶼」という場所にどのような文化があるのか、どういった歴史背景があるのかを、中心に学んできた。その授業の中で、鹿児島市という地方都市に住むわたしは、数々の衝撃を受けた。単に島は地方の田舎と同じようなものだと思っていたが、そういうわけではなかった。島嶼地域の隔絶性は、地方の田舎とは違う。陸路では決してたどり着けない島嶼地域には、島ならではの生活、文化、歴史などが存在する。そして、島ごとに異なった多様な文化が存在し、歴史背景も全く違う。世界的に見て、アジアとヨーロッパの文化や歴史が異なるように、島ごとによって文化や歴史が異なっている。講義で学べば学ぶほど、知れば知るほど、島嶼地域ならではの面白みが見えてきて、実際に行ってみたいという気持ちが高まっていった。

硫黄島に行ってみると、またそこで新たな驚きと衝撃を受けた。鹿児島市からフェリーで出発して、約3時間半をかけてたどり着いた島は、海が褐色に染まり、海沿いには地層の様子が鮮明にある岩肌がむき出しであり、陸には緑色の木々が美しく、白煙の噴く火山がある、自然の雄々しさを感じさせる島であった。島に着くまでのフェリーの中での三島村役場の先生による事前講習で、硫黄島について深く学び、大体どういう島であるのかは想定していたが、実際に見たその自然の迫力には、言葉を吞むほど圧倒されてしまった。島の中でもあらゆる体験があった。地質が物語る火山活動の壮大なエネルギー、展望台から見る島の美しい景観、海沿いにある露天温泉、ジャンベという楽器の演奏、夜の星空の瞬き、穴を掘ったら海水ではなく温泉の水が感じられる褐色の浜辺、と決して普段の日常では感じることはできない、学ぶことはできない、硫黄島ならではの体験ができた。硫黄島のあらゆる場所で物語られる自然の壮大さには本当に感動した。また、島の産業や食文化、景観などを見ていく中で島嶼地域社会ならではの、面白みも

分かってきた。

この硫黄島の実習は、1泊2日という少ない期間であるが、たくさんのことを体験できる有意義な実習であった。実際にその場所に行き、実物を見て、話しを聞くことは、大学の教室の中で、机に座り、画面やプリントにある文字や写真を見て学ぶことよりも、大きな感動があり、頭にその出来事が鮮明に刻まれた。島嶼という地域を、自分なりに理解することができ、大きな収穫となった。

## (2) 自己観点から見た硫黄島のまとめ

硫黄島実習の際、個人的な観点から硫黄島の社会というのはどういうものかを注目していた。私は大学院で農業経済を専門にしているので、今回注目した点は、硫黄島の産業、硫黄島の食、硫黄島の景観・インフラの3点である。

まず、硫黄島の産業についてである。第一次産業について、漁業は安定した生産があるようであった。農業に関しては繁殖牛を行っており、島で最も生産額の高い産業であるが、繁殖牛以外は、農産物の生産が全くない。個々で自家菜園を行い、自分たちで食べる分だけを賄っているという状況である。自家菜園で栽培されるのは、じゃがいもなどの根菜類が多いようであった。根菜類が多い理由は、硫黄島の火山である硫黄岳の活動の影響で、葉物野菜はうまく育つことができないという特徴があるからである。そのため、出荷するような農作物は作れず、自家用のものが中心となっているこれは後々の食文化にも関わってくる。林業において、林産物は樺とたけのこがある。硫黄島では、樺がかつてより自生しており、たくさんの樺を見ることができる。硫黄島ではこの樺の実を拾い、加工し、樺油や樺石鹼などに加工していた。樺の実をとる作業は大変なものであるため、樺の周辺に生える草など除去し、樺がとりやすいように整備されていた。たけのこは三島村全体で「大名筍」としてブランド化されている。まだ、ブランド化されて間もないようで、これからいかに産業として安定化していくかという段階にあるようだ。第二次産業においては調査不足であるため割愛する。第三次産業について、サービス業は民宿など宿泊施設が中心となる。民宿は全部で5件ほどある。硫黄島に商店は一軒だけある。この商店の商品価格はだいたい本土に比べて、約1.5倍である。価格が高いのは輸送費などの影響だそうだ。商店の商品の種類は多様ではなく、カップ麺やおかし、肉などの冷凍が効くものなどの保存に適している商品が中心となっている。どの産業も全体的に小さく、島での産業は厳しいように感じた。

次に、硫黄島の食についてである。上記で述べたように、硫黄島の農産物は根菜類が中心になっている。そのため、食における野菜は根菜類が中心となり、葉物は食べる機会が少ないそうだ。島外から葉物を取り寄せようとしても、葉物は鮮度的な問題があり、

船で運んでくるのが難しく、また輸送費がかかってしまう。商店も一つしかないので、食は島外から取り入れることも多いようである。食の乏しさを感じている島民もいるようであった。事前学習で、小さい島ほど味が減っていき、食文化の発達が少ないということを知っていたが、まさにその通りであった。

最後に硫黄島の景観・インフラについてである。景観は壮大な自然に囲まれ、本土では決して見ることできないものである。集落の低い石垣などは島特有の景観である。特に、硫黄の影響による褐色の海や浜辺、地層の見える岩肌、野生のクジャクなどは、ほかの島でもなかなか見ることできるものではない。また、インフラは必要最低限に整備されている。車がすれ違えるかどうかの道の細さであり、小さい看板が少なく点在し、信号機はない。この必要最低限のインフラによって、硫黄島の自然の景観を保護しているように思えた。

### (3) 硫黄島の地域活性化について考えたこと

最後に、硫黄島の地域活性化について自分なりに考えた事を述べていく。

地域活性化とは非常に曖昧なもので、あらゆる視点から考えることができる。私の専門は農業経済であるので、経済や経営的に考えていく。経済的に地域活性化させていくには、島にお金が入ってくるような、それが島内で循環するようなシステムを構築することが大事となる。

産業においては、島にある資源に付加価値を付けて、いかに島外に販売できるかが重要となってくる。大名筋の取り組みは、島の資源を活用し、ブランドという付加価値を付けることで、島に安定した産業を生み出すことができる非常に良いものであると感じた。椿においても加工などを積極的に行い、付加価値を付けている。甬島の下甬地域では、地区コミュニティ活性化事業を活用し、椿を加工し、東京などの美容系の会社への販売も行っている。顧客の選択も重要となる。

第三次産業のサービス業、特に観光での盛り上げも地域活性化において大事となる。鹿児島には多数の有人離島があるため、他の島とは差別化していくことが重要となる。ジオパークなどの硫黄島にしかない魅力を考慮し、さらにSWOT分析等で硫黄島の状況を把握したうえで、ポジショニングと顧客の特定をしていく。そのうえで、課題の解決、硫黄島のファンづくりのためのPRしていくことが大事だと考える。観光客が増えるにつれ、島の特産品や他のサービス業などが盛り上がっていくことが好ましいように思える。

